

## メソジズムにおける Altar Rail (Communion Rail) をめぐって —「恵みの座」保持の意義とメソジスト・ヘリテージ—

林 牧人

### 序

日本基督教団の成立より 65 年を経過した。日本におけるプロテスタント教会の宣教は、2009 年に 150 年を迎えるとされている<sup>1</sup>。合同教会としての歩みは、教派教会としての歩みの長さ近づきつつある。日本宣教の実質的な歩みを考えると、もはや教派教会としての歩みを超えていると言っても過言ではない。教派教会の歩みを直接体験した世代も少なくなっている。教団の多くは、教派教会としての歩みをもつことなく生まれた戦後の開拓教会によって占められている。加えて、教派教会としての歩みを持ちながらも、合同教会の一員であることに重きを置く故か、教派色の強いものを極力排除していく流れが、既成教会の中に見られたのも事実である。

このことは、旧日本メソジスト教会に属する諸教会においては、戦災復興会堂の建築に際して、「恵みの座」の撤去（ないしは無設置）という形で顕著に表れたように思われる。その際、配餐方法は従来通りのままにするとところ、跪座陪餐を止め会衆席での着座陪餐に切り替えるところ、様々であったが、物理的構築物としての「恵みの座」が失われることは、必然的に聖餐理

解の変化をも招致し、結果的にメソジスト・ヘリテージの継承がふさわしい形を取りにくくなったと言わざるを得ないであろう<sup>2</sup>。また、会堂建築における「恵みの座」の排除には、「柵を設けることは、その内部が特に聖なる場であることを印象づけることになる。メソジスト教会では「恵の座」としてこれを残すことが伝統であると言われる。『立ってはおぼかすことなく、恵の座に来れ』というのは、柵の設けられている座ではなく、むしろ主のテーブルに着けというのが真意であると思う。だから柵にこだわる必要はない（中略）強いて聖なる場を設ける必要があれば、礼拝堂全体が聖なる場とされて良い。もちろん会衆の席もこの中に含まれなくてはならない」<sup>3</sup>とあった、メソジスト・ヘリテージ内部からの批判もあって、それなりの影響力を持ったことは否めない。すなわち、プロテスタンティズムにあって、会衆席と聖餐卓の間を遮る障害物が本来的にあってはならぬとの批判である。

一方で、教派教会としての歩みと体験がふさわしく継承されないことに危機感を持つ人々の存在も根強く、かえって声高に「恵みの座」の保持が叫ばれているのも事実である。ことに、40 年来のいわゆる教団紛争の混乱した神学的状況の中で、依って立つ土台としての教派的伝統が再発見され、教派的なるものは障害物として排除されるべきものではなく、自覚的にふさわしく継承され、また、他の諸伝統との折衝の中で、合同教会の形成にあたって、豊かさを増し加えるものであるとの確信が、ここにはあるといえよう<sup>4</sup>。

「恵みの座」不要論、また、保持の主張、いずれにおいても、「メソジスト教会では『恵の座』としてこれを残すことが伝統であると言われる」という「常識」が前提とされている。しかし、この前提についての説明は、寡聞にして知ることがないというのが現状ではあるまいか。

メソジスト・ヘリテージ継承の要として挙げられているにもかかわらず、Altar Rail の起源自体は、英国教会にあり、アングリカニズムにおいても等しく継承

<sup>2</sup> これら、会堂建築における「恵みの座」の取り扱い、配餐方法の変化など、限られたサンプルは示すことはできるが、もう少し丁寧な調査を必要とするとは言うまでもない。これは、今後の課題である。

<sup>3</sup> 長久 清『教会と教会堂』、日本基督教団出版局、1988 年、71—72 頁

<sup>4</sup> 「更新伝道会」等がその例である。

<sup>1</sup> 日本基督教協議会が 1959 年に「宣教百年記念大会」を催したことに依る。この数え方について、異論もある。

されており、メソジズム固有のものではない。また「メソジスト教会」以外の、メソジズムに生きる教派教会、例えば、ウェスレアンを標榜する諸教会において、**Altar Rail** が継承されていないという現実がある。

ここでは「恵みの座」の用語は、陪餐用跪座台という物理的構築物とは異なるものを指している。救世軍においては、別の重要な役割を担う物理的構築物を指している。従って「メソジズム」における「恵みの座」=**Altar Rail** の存在は、そもそも自明ではない。

日本メソヂスト教会以来の習慣では「恵みの座」はいわゆる **Altar Rail** を指す言葉として知られているが、なぜ「恵みの座」と呼ばれるのかについては、先前提以上不明であると言わざるを得ない。「恵みの座」にあたる用語は、**Sinner's Bench**、**Mercy Seat** 等が該当すると思われるが、これらは **Altar Rail** と必ずしも同一視できない。「恵みの座」という表現は、むしろ、19 世紀の北米キャンプミーティングに起源をもつのではないかと推測される。

以上のような認識を持って、メソジズムにおける「恵みの座」=**Altar Rail** について考察し、その保持の意義についての問いそのものを共有し、今後の研究の端緒とすること、これが、本論の目的である。

## 1. 英国教会における跪座陪餐の定着に至る背景

英国教会司祭ジョン・ウェスレーに由来する「監督権」に与ることを通して、歴史的主教制に与る契機を与えられているメソジズム<sup>5</sup>は、職制についてと同様に、跪座陪餐を含めた礼典理解、教会理解においても、英国教会のそれを受け継いでいるし、英国教会を通して、さらなる伝統の継承へとさかのぼることができると考えて良い。従って、メソジズムにおける跪座陪餐を問うには、英国教会、そして、そこに至る背景を考察する必要がある。そもそも **Altar Rail** の起源はどこに見いだしうるであろうか。

跪座陪餐自体は、11 世紀頃から 16 世紀にかけて、ローマ・カトリック教会で非

常にゆっくりとした速度で普及したといわれる<sup>6</sup>。しかし、**Altar Rail** の設置は、このこととは別に既に展開を見せていた。

古代北アフリカの諸教会では、敬虔さの発露から、祭壇の周りに柵をめぐらした。陪餐者は、祭壇の下で聖餐に与ったのである。聖餐に与る者への勧めとして「少なくとも **Altar Rail** から追放されないように（自らを）整えよ」とのアウグスティヌスの言葉はよく知られている<sup>7</sup>。

一方、聖体への極度の敬虔さの深まりは、やがてミサ聖祭そのものを秘儀化させ、会衆は、主祭壇の下ではなく、傍らの小祭壇に設置された聖櫃（タバナクル）に保存された聖別済みの聖体に与るという習慣が生まれるようになる。秘儀化されたミサ聖祭に伴って、主祭壇の位置は徹底的に高められ、建物の奥へと、そして、会衆から遠ざけられた。極めつけは、ロードスクリーンと呼ばれる、会衆席と内陣を仕切る壁の存在である。会衆は、パンが聖別されるときに開かれる扉から、司祭の奉挙する聖体を見ることができただけであった（聖体奉挙の導入は 13 世紀パリと言われる。ゴシック建築の隆盛との関連に注目する）<sup>8</sup>。その頃から、このスクリーン（あるいは小祭壇）と会衆席との間に、陪餐時に二人のアコライトに捧持される形で布が敷かれるようになり、その上で跪座陪餐が行われた。やがて 16 世紀に至り、スクリーンと会衆席との間にテーブルないしはベンチが置かれ、それ全体を覆う形で布が敷かれ、そのうち敷かれっぱなしとなった。やがて、テーブルやベンチの代わりに、跪けるように計算された高さの柵が木製、金属製、ないしは石造りで設置されるようになり、17 世紀には殆どの陪餐者が、柵において跪座陪餐に与るようになった<sup>9</sup>。この場合の「柵」は、祭壇を囲む **Altar Rail** ではない。正しく **Communion Rail** という表現がふさわしい。

ところで、アングリカンにおける跪座陪餐と **Rail** の関係はどのようなものであろうか。16 世紀までの流れはローマ教会そのものである。この地点から、17 世紀、

<sup>6</sup> Joseph A. S. J. Jungmann, *The Mass of the Roman Rite, Vol.2.* (Westminster: Christian Classics, Inc., 1992), p. 376.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.375.

<sup>8</sup> エドワード・フォーリー、竹内謙太郎訳『時代から時代へ』、聖公会出版、2004 年、87-88 頁

<sup>5</sup> 拙論「日本メソヂスト教会における監督制の背景—メソジズムにおける episkope の実践—」『ウェスレー・メソヂスト研究』2 (教文館、2001) 参照

ローマ教会において聖餐用跪座台設置が一般化するまでの歩みが異なるものとなったのである。ヨーロッパ大陸の宗教改革においては、聖堂の大改装と共にロードスクリーンは撤去されることが多かったのに対し、英国ではそのまま残されることが多かったと言われている。会衆席は、祈祷書に基づく朝の祈り、夕べの祈りに用いられ、聖餐礼拝は、かつての聖歌隊席、即ちスクリーンの内側で守られた<sup>9</sup>。内陣の中央には、Altar に代えて Table が設置され、司祭は Table の端（北側）に立って聖餐を司式する形で統一が図られた。1552年、第2祈祷書が編纂される頃には、木製の聖餐桌への置き換えはほぼ完了していた<sup>11</sup>。司祭と会衆は、もはや何ものにも遮られることなく、主の食卓の恵みを共有したのである。エリザベスの治世下においては、Rail の存在は知られることはなかった。Table は、何ものによっても保護されてはいなかったのである<sup>12</sup>。

やがて、17世紀、ステュアート朝の治世、大主教ウィリアム・ロードの影響下、急激に旧来の秩序を回復する動きが出た<sup>13</sup>。Table は再び Altar として、東面の壁側に接する形で配置され、その周りが「柵 (Rail)」で囲まれたのである。これが、メソジズムにも受け継がれる、英国教会の Altar Rail の起源である。これは、ロード主義者の発案ではない。先述したように、同時期、ヨーロッパ大陸のローマ教会において、スクリーンの前に、Communion Rail が設置される慣行が定着しつつあり、さらに、イエズス会のバロック建築に端を発する、スクリーンのない聖堂においては、祭壇の直下に Communion Rail が設置されることが珍しくなくなっていた。それを、Altar Rail と読み替えて設置したのである。東面の壁から北、西、南とぐるりと囲んで再び東面の壁へ、Altar は完全に囲われることとなる。多くは木製である (Altar も木製、即ち、実態としては Table)。そして、北側ないしは西側正面に扉が付けられている<sup>14</sup>。そして、Rail を設置する理由として、英国では大陸とは異

なる主張がなされた。それは、「犬ども」から主の食卓を守るためであるという。具体的には、世俗の目的のための使用から主の食卓を守る働きを Rail に持たせ、東面の壁面に美しさをも加えることとなった<sup>15</sup>。

このことは、当然のことながら陪餐方法に変化をもたらした。司式司祭は相変わらず北側に立っていたが、陪餐者は、Rail に跪いて与ることが求められるようになったのである。跪座陪餐自体は、エリザベス期に定着を見ている。ただ、跪くために進み出る場所が変化したのである。そして、結婚式など、祈祷書に含まれる他の諸儀式執行のためにも、Rail は用いられるようになっていくのである<sup>16</sup>。ことに、ロンドン大火の後、聖パウロ大聖堂をはじめとする諸教会の復興を託された建築家、クリストファ・レンが、オーディトリウム<sup>17</sup>と呼ばれるようになる、音声重視のアングリカニズム建築様式を確立させるにあたり、Rail の設置を取り込んだことで、決定的となった。ローマ教会のバロック建築に影響を受けたレンは、その Communion Rail の設置方法を Altar Rail に応用したのである<sup>18</sup>。やがて時代が下がり、19世紀、オクスフォード運動における典礼復興の結果、木製の聖餐桌は、石造りの祭壇へと回帰し、東面は美しいソールドが設置され、結果として、16世紀以降、別々の道を並行して歩んできた、ローマ教会とアングリカニズムとが、結果として似たような建築様式を獲得するに至るのである。

アングリカニズムにおける跪座陪餐の定着は、実際のところ一朝一夕でなされたものとはいえない。そこには、絶えず反対と抵抗があった。宗教改革の成果から古代の式文研究の成果に至るまで、その持てる知識を最大限駆使してクランマーの手により編纂された第1祈祷書は、改革主義者、ローマ主義者双方に、批判的に受容されたが、ローマ主義者に許容されたことがかえって、クランマーをして、よりプロテスタンティズムに近づいた第2祈祷書の編纂へと向かわしめた<sup>19</sup>。そこでは、

<sup>9</sup> Jungmann, op.sit., p.375.

<sup>10</sup> エドワード・フォーリー、前掲書、110頁

<sup>11</sup> J. F. ホワイト、越川弘英監訳『プロテスタント教会の礼拝』、日本基督教団出版局、2005年、188頁

<sup>12</sup> G. W. O. Addleshaw, *The Architectural Setting of Anglican Worship* (London: Faber and Faber Ltd., 1962), p. 118.

<sup>13</sup> J. F. ホワイト、前掲書、194–195頁

<sup>14</sup> Addleshaw, op.sit., p. 122.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p.165.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p.164.

<sup>17</sup> 説教を重視し、バロック建築を基調としつつ、東面聖餐桌を中心に、説教台と聖書朗読台を左右対称に配置したもの。祈祷書での陪餐義務の減少と相まって、聖餐軽視の流れを生んだとも言えよう。Rail の設置が sacramentalism につながるわけではない。

<sup>18</sup> *Ibid.*, p.162.

<sup>19</sup> 塚田 理『イングランドの宗教』、教文館、2004年、86頁

ローマ主義者たちが主張していた要素、とりわけ聖餐におけるキリストの「**Real Presence**」の考えを極力排除するように努めた。例えば「祭壇」は「聖餐桌」にと言った具合である。しかし、クランマーは、聖人の記念日を増やす、跪座陪餐の義務化など、保守派への配慮にもじませている<sup>20</sup>。この「配慮」に抵抗したのが、ジョン・ノックスである。ノックスは、印刷間際になって、自らの主張を挿入させることに成功した。いわゆる「**Black Rubric**」<sup>21</sup>である。これによって、跪座陪餐を排除できなかったとしても、その内実を無力化することに成功したのである。化体説及び真臨在 (**real presence**) の否定である。これは、**1559**年エリザベス祈禱書での削除を経て、**1662**年祈禱書で復元される。そして、**19**世紀米国メソジスト教会において、その主張が再び表に出ることになる<sup>22</sup>。この **Table** 理解と跪座陪餐の共存こそ、ウェスレーが、英国教会を通じて受け継いでいるものなのである。

## 2. ウェスレーと英国メソジズムにおける跪座陪餐の実践

オックスフォード時代のウェスレーは、臣従拒誓者的高教会の系譜に立つ聖餐理解とその執行で知られている。ことに、使用が禁じられていた **1549**年の第 **1** 祈禱書を用い、ローマ主義者の主張とされていた、チャリスに水を混ぜることまで行っている<sup>23</sup>。聖餐の犠牲的側面と真臨在 (**real presence**) の重視がここにある。加えて、ウェスレーの英国教会と祈禱書に対する限りない愛が、彼をして、跪座陪餐こそふさわしい振る舞いであるとの確信へと至らせたのであろう。日記には以下のように記されている。

「**200**名近くの陪餐者に、聖餐を執行した。こんなにも厳かなひとときを、私は、

ノリッジで持った覚えがない。彼らの内大部分が非国教徒だったので、各自その最善と思う態度をとるよう、私は要望した。もし私が、彼らに跪くことを要求したら、恐らく半数の者は座ったであろうが、今は、一人を除いて全ての者が跪いた。」<sup>24</sup>

ここでは、跪座陪餐が推奨されているけれども、いわゆる **Rail** の使用については言及がない。あたりまえといえばあたりまえであるが、ウェスレーにおいて、跪座陪餐という慣習こそが「ふさわしい」陪餐方法であるという確信があるのであって、後のメソジスト教会が主張するような **Altar Rail** そのものに何か固有の価値を見いだしているわけではないことが読み取れよう。強いて言えば、後に建築する礼拝所において、あえて **Rail** を設置することで、非国教徒とは一線を画するという主張が見て取れる。

彼が依拠しているのは、基本的には現行の **1662**年祈禱書であり、これは、**1552**年のカルヴァン主義的色彩の濃い第 **2** 祈禱書がベースとなって編まれたものである。その特徴は、実のところ、ウェスレーのメソジスト運動を基礎づけるような内容と言っても良いのではないだろうか。ことに、聖餐礼典の式文は、人間がいかにか罪深く、神の前に立つに値しない者であるかを自覚させる内容であり、「感謝の祭儀」というよりも、「悔い改めと懺悔」に彩られた式文であると言って良い。それが顕著に現れ出ているのは「近づきの祈り (ハンブルアクセス)」<sup>25</sup>である。この祈りの挿入に象徴されるように、聖餐のリズム (奉献、聖別、パンさき、陪餐、そして派遣と続く一連のドラマ性) が崩されている。さらに「信仰を持ってこれを食し、キリスト汝のために死にたまひしことを感謝して記憶せよ」との分餐の言葉に表される「信受者主義 (キリストの現存が信仰者の信仰の強弱に依存する)」のような印象を与えることになる。そして、祈禱書全体を貫くのは、徹底した「聖書主

<sup>24</sup> **Journal, 1759.3.18.**

<sup>25</sup> 「あわれみ深い主よ、わたしたちは自分の義に頼らず、ただ主の限りないあわれみによって、いま主の聖餐にあずかろうとしています。わたしたちは、聖なる食卓から落ちるくずを拾うにも値しないものですが、主は変わることなく常に養ってください。今、み子イエス・キリストの肉を食し、その血を飲むことによって罪に満ちた霊と肉とを洗いきよめ、わたしたちが常にキリストのうちにあり、キリストが常にわたしたちのうちにありますように。」

<sup>20</sup> 前掲書、90頁

<sup>21</sup> 「(跪くのは) すべての陪餐者にそれを通して与えられるキリストの恵みに対する謙遜と感謝を表すため、また、結果として、聖餐礼典を混乱させたり冒流したりすることにならないようにするためである。」

<sup>22</sup> J. F. ホワイト、前掲書、122頁

<sup>23</sup> 野呂芳男『ウェスレー』、清水書院、1991年、113頁

Horton Davis, *Worship and Theology in England, Vol. 3*, (Grand Rapids: Eerdmans Pub., 1996), p. 187.

義」である。<sup>26</sup>

英国教会の39箇条第28条は、聖餐におけるキリストの真臨在 (real presence) を強調しつつ、神学的解釈を避け、霊的な sacrament であるとした<sup>27</sup>。いわば、どのような立ち位置からも解釈可能なのである。ただし、聖餐理解がカルヴァンのそれに依るとなれば、ツヴィングリのそれとは異なり、キリストの真臨在 (real presence) を主張することは、十分に可能である。高教会主義者といえども、ローマ教会の化体説とは一線を画するのであって、聖書の中に表現されている初代教会への素朴な憧憬から、聖餐礼典中心の教会と信仰の再構築を求めたのである。この点においては、カルヴァン主義者のそれと変わるところはない。ウェスレーに見られる、ピューリタニズムと高教会主義との奇妙な同居状態は、この角度から説明できる<sup>28</sup>。にもかかわらず、彼の基調は高教会主義にある。それが顕著に表れるのが、real presence の受け止め方であろう。

ウェスレーは、化体説も共在説も退けた上で、聖餐におけるキリストの臨在は神性であると確認している。しかし、このカルヴァン的な理解にもかかわらず、彼の神学の中には、聖餐の犠牲的側面の強調が見られる。犠牲反復ではないが、ただ一度限りの全き犠牲が臨在する。いいかえれば、大祭司キリストは、今日も変わらずに祭司として自らの血を携えて執り成してくださる。「永遠の今」という出来事がここにある。天上の勝利者イエスが聖霊を媒介にして臨在すると言う側面もあるにはあるが、聖霊の媒介なしに、キリストの出来事そのものが真臨在 (real presence) するという神秘性がある。ただし、この神のダイナミックな臨在は、パンと葡萄酒という物素に封じ込められてはいない。神が働かれるところに神はおられる。生きた人格が恵みの手段を通して働かれると言うことである<sup>29</sup>。この真臨在 (real presence) のとらえ方こそが、後のメソジズムの歩みを決定づけ、跪座陪餐に新たな意義を与え、メソジスト・ヘリテージにおける Altar Rail の固有性を生み出すことになるのである。

### 3. ウェスレー以後の英国メソジズムにおける跪座陪餐の実践

ウェスレーの死後、英国メソジズムをおそったのは、聖餐礼典執行問題であった。監督 (Superintendent) だけとされたことも、年会構成員である巡回説教者なら誰でもよいとされたりと、執行者の問題で混乱が続いた<sup>30</sup>。しかも、皮肉なことに、非国教会の一員と化したメソジズムは、19世紀において、アンチ・アングリカニズムの気運が高まり、どの非国教会よりも、カルヴァン主義的な礼典理解を保持する結果となった。ウェスレーの臣従拒誓者的礼典理解は、都市部のわずかな説教者に継承されているのみで、他の数千人は、聖餐が単なる象徴になってしまったり、式文が単純化される方向に進んだりといった具合である。オックスフォード・ムーヴメントの間接的影響もある。これも、決してポジティブな影響とは言えない。運動の源をさかのぼれば、ウェスレーが見えてくるにもかかわらず、メソジズムは sacramentalism への深刻な拒絶反応を引き起こしてしまった<sup>31</sup>。

式文は、1662年祈祷書の他、ウェスレー自身が英国メソジストのために編んだ、祈祷書の編集版 (1792)、さらに 1835、1878、1882、1910 と、それぞれの年、新しい式文集が編まれている。しかし、どれも殆ど用いられることはなく、むしろ、1662年祈祷書が多く用いられているという現状があった<sup>32</sup>。

しかし、忘れてはならないことは、いくらピューリタンのセオリーに則って聖餐礼典を執行しているといえども、その実践においてまでピューリタニズムに陥っているわけではない。なぜなら、Communion Rail は、メソジストがピューリタニズムではなくアングリカニズムにより近いことを示し、人々はそこで、「牧師の手から」パンと杯を受け取るのである<sup>33</sup>。

式文の変遷、執行者をめぐる混乱、にもかかわらず、跪座陪餐は絶えることなく

<sup>30</sup> 拙論「日本メソジスト教会における監督制の背景—メソジズムにおける episkope の実践—」、『ウェスレー・メソジスト研究』2 (教文館、2001)、参照

<sup>31</sup> Horton Davies, *Worship and Theology in England, Vol. 4*, (Grand Rapids: Eerdmans Pub., 1996), pp. 260–261.

<sup>32</sup> John C. Bowmer, *The Lord's Supper in Methodism 1791–1960*, (London: The Epworth Press, 1961), pp.30–31.

<sup>33</sup> Davis, *op. cit.*, p. 261.

<sup>26</sup> 塚田 理、前掲書、87–88頁

<sup>27</sup> 前掲書、97頁

<sup>28</sup> 野呂芳男、前掲書、69–70頁

<sup>29</sup> 藤本 満『ウェスレーの神学』、福音文書刊行会、1990年、361–363頁

守られてきた点には注目しなければならない<sup>34</sup>。ただし、後の分裂で、ウェスレーンではないポディーのメソジストが誕生すると、やや事情は異なってくる。中でも、**1819**年の「バイブル・クリスチャンズ」の分離は、今までと様相を異にした。創立年会で、除夜礼拝と愛餐についての協議はあるが、聖礼典についての記録がないのである。ようやく第**3**回年会(**1821**)において、聖礼典について審議され、明快な象徴説が採られている。加えて、跪座陪餐が完全とは言わないまでも否定されるという事態となった。より「聖書的」であるために必要なこととされている<sup>35</sup>。やがてむかえる**1932**年の大合同においても、この積み重ねはかき消されず現在に至っている。現在の英国メソジスト教会の礼拝書には、陪餐方法については「ローカル・カスタムに依る」と記されるのみであることが、この事情を物語っている<sup>36</sup>。メソジスト・アイデンティティの主張から解放され、むしろ、他教派との共同宣教(LEP)の拡大、英国教会との再一致へと向かう中で、跪座陪餐の固有性は薄れ、それに伴って、**Rail**の必要性も薄まってきていると言えるだろう。この事情は、母教会である英国教会においても同様である。

#### 4. 北米メソジズムにおける跪座陪餐の実践

北米のメソジズムは、ウェスレーが初代教会にならった最も純粋な教会建設を意図して、「監督(Superintendent)」を「聖書的主教(エписコポ)」としての権威で聖別し、**1662**年祈祷書の編集版である「**Sunday Service**」と共に遣わしたことで、英国メソジズムのような混乱に陥ることなく、その歩みを始めることができた<sup>37</sup>。

**1785**年**1**月、ニューヨークの会堂にアングリカンにならった**Table**及び**Rail**設置の記録が見られる。その前年に発足した、米国メソジスト監督教会の中でも、最も古い**Altar Rail**設置の記録と言えよう。説教壇と聖餐卓の両方が「柵」で囲われた

様は、以降、メソジズムの建築を特徴づけることとなり、**Rail**は、メソジストの礼拝において最も聖なる場所として、後にはそれ自身、**Altar**と呼ばれるに至るのである<sup>38</sup>。

米国伝道は、ウェスレーの意図しない形で進行した。それはアメリカという新しい環境の所以、また、そのために召された働き手の性質、そういったものによって変化を被らざるを得なかったからである。監督アズベリーは、ウェスレーの実用主義からは多くを学んだが、一方で、ウェスレーの伝統主義、すなわち、祈祷書への愛、頻繁な聖餐執行の強調、教会暦の重視、といったものを殆ど受け継がなかったのである。アズベリーの敬虔の重点は、 sacramentではなく説教と信徒訓練に置かれていたのである。程なくして、ウェスレーの「礼拝書」は忘却され、より簡素な「Sacrament礼拝、その他」というディシプリンの記述が全てとなり、やがてこれを「**Ritual**」と称し、改訂が重ねられていくことになる<sup>39</sup>。

メソジストは勢いに乗り、アパラチア山脈を越えて、いよいよ西部開拓地域の宣教に着手した。伝道の進展と、聖礼典の軽視、これはやむを得ない相関関係と言わざるを得ない。メソジズムの持つ職制重視(聖礼典執行者の資格を、受按教職と厳しく規定した)故の教職不足とそれに伴う礼典執行回数減少、そして、開拓地域での新しい宣教方法、キャンプミーティングの隆盛がこれに追い打ちをかけることとなった。

開拓地には安定した居留地はわずかしがなく、広大な大地に人々が点在している状況である。教会共同体を形成することは、物理的に不可能だったのである。ここに、メソジストの巡回説教者の働き場があった。家庭訪問、キャンプミーティングの動員活動、そして求められればどこでも説教した<sup>40</sup>。

開拓地の礼拝に求められたのは、信仰を復興させるための訓練ではなく、教会に属したことがない人々に、教会の信仰そのものに触れてもらうことであった。読み書きも満足にできない人々に、讚美歌は効果的に作用した。そして、祈祷書に則った定められた形の礼拝ではなく、自由な形式そのものであった。開拓地そのものが、

<sup>38</sup> Karen B. Westerfield Tucker, *American Methodist Worship*, (New York: Oxford University Press, 2001), pp.241–242.

<sup>39</sup> J. F. ホワイト、前掲書、293–294頁

<sup>40</sup> 前掲書、296頁

<sup>34</sup> Ibid., p.261.

<sup>35</sup> Bowmer, op. cit., pp.35–37.

<sup>36</sup> *The Methodist Worship Book*, (Peterborough: Methodist Publishing House, 1999)

<sup>37</sup> 拙著「ジョン・ウェスレーの職制理解—「1784年の按手礼」とメソヂズム—」、東京神学大学神学会『神学』59号(1998)参照

自由を基調としており、礼拝においてもそれは犠牲とはされなかったのである<sup>41</sup>。讚美をする、メッセージに大声で応答する、**Altar Call** に応じて前に進み出る、どれも身体の動きを伴うものである。ここで言う **Altar**こそ、説教壇と聖餐桌を囲むようにして設置されている **Rail** そのものを指す言葉である<sup>42</sup>。

アングリカニズムよりメソジズムへと受け継がれた跪座陪餐と、そのための道具としての **Altar Rail** は、いまやここに、固有な意義を持つに至ったのである。開拓地での宣教、しかも、粗野でありつつ魂の獲得のためには伝統を考慮せず何でも取り込んでしまうような状況<sup>43</sup>は、**Altar Rail** の位置づけと目的に変化を招致したのである。聖餐による真臨在ではなく、**Altar Rail** そのものが、**Altar** となり、真臨在に与る場所、自らを献げる場、回心者の悔い改めの祈りの座との認識が生まれる。**Rail** そのものが、その存在感を増していったのである。それに比して、巡回説教者の任命がようやく週ごとの主日礼拝を可能にするかどうかの段階で、聖礼典執行のための巡回長老 (**elder**) の派遣は、殆どままならなかったと思われる<sup>44</sup>。この状況下で、聖餐桌の位置は著しく低下し、**Rail** の保持にもかかわらず、聖餐桌がより小さくなるという現象も生まれてきたのである。否、むしろ、**Rail** の保持こそが、メソジズムのシンボルとして受容、主張されていくのである<sup>45</sup>。今回、触れるいとまがないが、パーマーなどに代表される祭壇神学の隆盛もまた、これらの動きと無関係ではない。聖餐桌ないしは聖餐礼典そのものよりも、**Altar Rail** に意味が出てくるのである。

ここで、確認しておきたいことは、**Altar** 概念の拡大である。開拓時代に開拓地で伝道したのはメソジズムだけではない。バプテストは幼児洗礼やオープン・コミュニティオン (フリーではない) の問題をめぐって、メソジストと激しい議論と競争を繰り広げた。さらに、長老派、会衆派といった、カルヴァン主義的改革派神学を背景にもつリヴァイヴァリストたちが、大きな働きをしている。どれもが、開拓地にふさわしい礼拝のあり方を求めて、役立つことは何でも実用主義的に取り込んで実

践したのである。その意味で、開拓地のキリスト教は一種の「ブラックホール」のように諸教会の伝統の持つ特徴の多くを飲み込んでしまう傾向を持っていた<sup>46</sup>。その結果として、メソジズムが保持してきた **Altar Rail** の伝統は、他の開拓地伝道に励む諸教会でも導入された。物理的に聖餐桌を囲む「柵」としてではなくとも、ベンチ型、テーブル型、あるいは物理的構築物なしでも、様々なバリエーションがある。ここから **Sinner's Bench**、**Mercy Seat** といった呼称が派生したのであろう。これが、メソジズムに逆輸入されても不思議ではない状況がある。

やがて、開拓時代は円熟期を迎え、かつてのキャンプミーティング、あるいは、あずま屋での集会所は、大規模な教会建築をするまでに至った。コロニカル、ジョージ王朝風、グreek・リヴァイヴァル、そして、ゴシック・リヴァイヴァルといった 19 世紀流行のあらゆる建築様式をまねて、積極的な会堂建築が遂行された。外見は様々でも、内部の意匠はほぼ同様で、正面ステージ上に、説教壇 (ないしはテーブルのような横長の講壇) と 3 脚の椅子が置かれた。牧師、ゲスト説教者そして讚美リーダーこれで 3 脚である。一説には、これで三位一体を表現するとも言われる。聖餐桌はステージ下、講壇前に置かれ、横幅いっぱい **Altar Rail** が置かれた<sup>47</sup>。

さらに、このタイミングで特徴的な建築様式が出現した。オハイオ州アクロン在住の実業家によって考案されたそれは、「アクロン様式 (**Akron Plan**) 」と呼ばれ、瞬く間に普及していった。日曜学校の隆盛と共に、教室の増築を図る諸教会が多かった。アクロン様式においてもこの課題は継承されている。半円形の礼拝堂は、正面ステージ上にオルガンやクワイヤ、説教壇、そして、ステージ下に聖餐桌、それを囲むように **Altar Rail**、さらにこの一連の要素をすり鉢状の底として階段状に会衆席が配置される。2 階バルコニー、あるいは、礼拝堂の壁面は可動式となっており、開けるとそこに、同一平面上の空間が出現する。これは、多くの場合、日曜学校に使われるスペースである<sup>48</sup>。

アクロン様式の出現によって、礼拝堂は一挙に劇場型へと変貌を遂げた。これは、もとをたどれば、バロック建築に行き着く。オペラハウスの隆盛と並行して、ヨー

<sup>41</sup> 前掲書、296-297 頁

<sup>42</sup> Tucker, op. cit., p.79.

<sup>43</sup> J. F. ホワイト、前掲書、297 頁

<sup>44</sup> 前掲書、300 頁

<sup>45</sup> 前掲書、303 頁

<sup>46</sup> 前掲書、332 頁

<sup>47</sup> Tucker, op. cit., p.243.

<sup>48</sup> J. F. ホワイト、前掲書、303 頁

ロップ大陸において、バロック様式の教会建築が増えていく。これは、プロテスタント教会の建築においては、中央一点集中型の構造を取ることを意味する。ローマ・カトリックのバロックがオペラハウスならば、プロテスタントのバロックはオーデトリウムである。極論すれば、アクロン様式の場合、説教壇とメッセージ、加えてメソジズムの場合、その招きに応える場としての **Altar Rail** こそが集中すべき一点構造であり、聖餐卓はおまけである。教理的典礼的な退潮、信仰的感傷主義とが、バロック様式に移行する教会建築と並行する<sup>49</sup>。これは正に、19世紀米国の状況に妥当する。

この時期、安易な復古主義的建築が隆盛を極める。中でも、メソジズムにおける中流意識の芽生えと、ゴシック建築へのあこがれ、これは即ち、天に向かって上昇しようとする思いの表れでもある。デューク大学礼拝堂に代表されるような壮麗なゴシック・リヴァイヴァルの教会建築が出現する。アクロン様式に遅れることわずかのことである。19世紀後半から20世紀前半にかけてのこの時代、ゴシック・リヴァイヴァルと並行して礼拝改革運動が起こったことは見逃せない。

開拓地が文明化されていく中で、メソジズムに生きる人々の自覚が促されたと言っても良いだろう。長老派、ルター派と同様、にわかには発生した「開拓地のブラックホール」に引き込まれたメソジズムは、我に返り、本来立つべき道を求めて動き出したのである。ルター派、長老派は、反動としての復古主義が目立ったが、メソジズムの場合、会衆派などと同様、自由主義神学へと流れる動きが顕著であったように思われる。あまりにも個人の救済に集中した結果として、社会的な事柄への関心に向かったのである<sup>50</sup>。礼拝改革運動と社会的関心とは相容れないようであるが、じつは、「美しく豊かな礼拝」の獲得は、メソジズムの社会的地位を相対的に向上させ、結果として、社会改革に力を発揮するというものである（審美主義）<sup>51</sup>。18世紀英国教会のような建築が美しいとされ、特に内陣周りが整備された。具体的には、奥行きのある内陣が設定され、東面に祭壇、その両脇にクワイヤ席、そして、内陣手前に説教台と聖書朗読台、と言う具合である。**Altar Rail** は、聖餐卓を囲む素朴な作りのものから、内陣柵の形を取るようになった（かつてのロードスクリーン

を由来とする故、中央に通路となる部分がある）<sup>52</sup>。

本来的な意味での礼拝改革運動は、ハーモン（後に監督）の書物<sup>53</sup>から始まった。もともと、南部メソジストは保守的傾向が強く、ウェスレーの伝統に帰ろうとする試みが散発的になされてきた経緯もある<sup>54</sup>。「neo-wesleyan」と呼ばれる立場に立つこれらの人々によって、メソジズムの諸伝統から失われていたウェスレーの示した一定の固定された礼拝形式の発展的復興がなされた<sup>55</sup>。これらは、ゴシック・リヴァイヴァルの成果によって復興していたアングリカニズム的な要素と相まって、大きな推進力となって、メソジズム全体を導いた。

しかしながら、その後の第2ヴァティカン公会議、またリマ文書・式文の成果を取り込みつつ新たな礼拝改革に取り組む中で、初代教会の生き生きとした式文が回復された反面、他の諸伝統同様、メソジズムの固有性が薄れ、比例するように、跪座陪餐の意義も重んじられることが少なくなっていると言わざるを得ない。これは、英国メソジストと同様の現象である。礼拝改革の成果が教会建築に取り入れられるたびに、物理的構築物としての **Altar Rail** は失われている。これをどのように評価し、受容するかは、今後の課題である。

さらに、ここでもう一つ触れておかねばならないのは、「メソジスト教会」以外のメソジズムを標榜する諸教会における **Altar Rail** をめぐる取り扱いである。WMCに加盟しない、いわゆるウェスレアン系に代表されるこれら諸教会は、開拓地の「ブラックホール」から解放されるに際して、自由主義の道を取った「メソジスト教会」に対してむしろ反発し、また、礼典理解においても、当時は「啓蒙主義的敬虔主義」ともいうべきものが支配的で、「信仰者の洗礼（幼児洗礼否定）」に代表されるように、恵みの手段としてのウェスレー的理解はそこには存在していないように思われる<sup>56</sup>。当然のことながら、物理的構築物としての **Altar Rail** は受け継がれず、むしろ、物理的構築物なしに「恵みの座」が開かれると言うことになっているのではな

<sup>49</sup> 前掲書、307頁

<sup>50</sup> Nolan B. Harmon, *The Rites and Ritual of Episcopal Methodism*, (Nashville: Publishing House of the M. E. Church, South, 1926)

<sup>51</sup> J. F. ホワイト、前掲書、295頁

<sup>52</sup> 前掲書、307-8頁

<sup>53</sup> 前掲書、336-337頁

<sup>49</sup> エドワード・フォーリー、前掲書、111-112頁

<sup>50</sup> J. F. ホワイト、前掲書、352-353頁

<sup>51</sup> 前掲書、307頁



いだろうか。救世軍については、「恵の座」という「別の形」で物理的構築物が再構成されて、悔い改めと赦しを得るために、真臨在 (real presence) に与る場としての意味づけがはっきりとなされているように思われる。Altar Rail そのものは受け継がれていないが、真臨在 (real presence) に与る場としての位置づけは、霊的に継承されているのではないか。このあたり、日本メソヂスト教会における Altar Rail の呼称問題とあわせて、今後の課題となるであろう。

## 5. 日本のメソジズムにおける跪座陪餐の実践

日本のメソジズムは、北米からもたらされた。その時期は、まさに激動の19世紀後半である。その教会建築は、正面ステージ上に、説教壇と3脚の椅子が置かれた。聖餐卓はステージ下、講壇前に置かれ、横幅いっぱい Altar Rail が置かれるという典型的なものである。宣教開始程なくしてアクロン様式の移植がなされるようになる。小規模会堂が多い日本の事情にも関わらず、正面にクワイヤとオルガン、ステージ上に講壇、下に聖餐卓と Rail という基本構造は変わっていない。北米ではすでに、ゴシック・リヴァイヴァルが隆盛を極めていく時期と思われる昭和初期の日本メソヂスト銀座教会 (現日本基督教団銀座教会) 第3次会堂は典型的なアクロン様式の日本における建築例である。また、同じく昭和初期の建築になる青山学院ベリー記念礼拝堂 (旧神学部礼拝堂) は、内陣の構造が、ゴシック・リヴァイヴァルそのものである。伝道者を生み出す礼拝堂がその形であったためか、その後、第2次大戦後に至るまで、同様の内陣配置を持つ教会建築が続いた (その場合、クワイヤ席を省略して奥行きをつめることが多い) が、散発的で、ゴシック・リヴァイヴァルの成果を殆ど受け入れることなく、教会合同と戦争へと向かったと解釈するのが適当であると思われる。少なくとも、それに付随した礼拝改革運動の成果は、審美主義にせよ「neo-wesleyan」にせよ、殆ど影響を受けていない。従って、日本メソヂスト教会は、リタジーと聖礼典復興の機会を失ったと言わざるを得ない。Altar Rail の物理的設置状況だけを言えば、日本の状況は、米国のそれと大差ない状況であったとも言えるかも知れないが、それがどれだけ自覚的な継承であったのかは、検証抜きに容易に判断できない。少ない聖餐執行 (年4回) の状況下で、Altar Rail は、教派的シンボルの域を出ることがなかったのではないだろうか。少な

くとも、真臨在 (real presence) に関わる諸問題が論じられた形跡を見いだすことができないのが現状である。現実問題として、合同教会成立後時間が経過していること、直接にはないが、英米と同様、リマ以降の礼拝改革運動の影響を受け、メソジズムの固有性が薄れ、跪座陪餐の意義が正しく受け継がれてはいないと言わざるを得ないだろう。

Altar Rail そのものを「恵みの座」と呼ぶ習慣は日本のみで保たれている伝統であると既に述べた。宣教師の訪日時期とその背景にある母教会の状況を重ね合わせると、何らかの形で Altar Rail を「恵みの座」と読み替えて違和感を覚えない人物、ないしはグループが最初期のメソヂストの日本宣教を担ったと考えるのが自然であろう。このあたり、しかるべき資料にあたりつつ、検証する必要がある。また、戦災による会堂焼失と復興会堂から消えた「恵みの座」の現実がある。ここには、教派的シンボル復興を良しとしない、内外の圧力も介在したと言われている。裏を返して言えば、それだけ「恵みの座」が教派的シンボルとして認識されていたということになる。ただそれに付随すべき、聖餐礼典のウェスレー的理解復興の影響を見いだすことはできない。同時に、Altar Rail の霊的理解についてはどうであったのか。これらもまた問いを提示することとどめざるを得ないが、今後の課題である。

さらに、本稿ではカナダ・メソヂストについて触れていないが、日本メソヂスト教会の一翼を担ったカナダ・メソヂストは、本国教会の合同成立の後どのように変化したか。カナダ合同教会成立後の建築と思われる旧メソヂスト諸教会には、はじめから「恵みの座」が無いというケースもあったという。これもまた検証待ちの課題である。

## 結

米国における「neo-wesleyan」の人々によるウェスレー的聖餐理解の復興は、開拓地伝道の混乱の最中見失われていた、メソジズムの本質を再発見し、ふさわしい形で生かし、後の礼拝改革につなげる大切な役割を果たしたと言えよう。さらに、Altar Rail を真臨在 (real presence) に与る場として受け止め直すならば、跪座陪餐の実践とウェスレーの聖餐理解は切り離すことはできない。

アングリカンが紆余曲折の未到達した Altar Rail 保持の伝統は、メソジズムにと

メソジズムにおける Altar Rail (Communion Rail) をめぐって

っては、より一層深く、聖餐理解とそこから生み出される信仰者の生活そのものに結びつくものとなったはずである。たとえ、それが途中で失われていた時期があったとしても、**Altar Rail** 保持の意義は、メソジスト・ヘリテージにおいて大きいと言わざるを得ない。ただし、形式的、感情的な保持の主張は、かえって形骸化を招くものである。聖餐理解の深化と共に主張され、実践されねばならないであろう。もちろん、これは、必須ではなくて、メソジズムをよりよく実践するためには、ふさわしいということである。

合同教会形成において、メソジズムは潤滑剤の役割を担うことが多いが、ことに、**Altar Rail** の保持と跪座陪餐の実践については、その意義を主張する形で新たな伝統形成に奉仕しうるものであると考ええる。特に、キリストの真臨在 (**real presence**) に「与る」場の回復に果たす役割は、決して小さくはないのではないだろうか。

(日本基督教団・洛北教会牧師)